



定例研究会報告要旨

第1886回（4月16日）

2000年農業センサス分析 ——家族経営構成別分類でみた 農家世帯と土地利用の現状——

江川 章

日本農業の構造変化では、農地流動化による上層農と離農層の形成が不徹底にしかならず、小規模農家層の著しい滞留がみられた。それは一方では、農家世帯員の一部が兼業化しながらも、家に最低限の労働力が残されている限り完全には離農しないという直系家族に支えられた対応の現れでもあった。このような農家世帯のトータルな就業のあり方が農業構造の変動に影響を及ぼしてきたといえよう。

農家世帯と農業構造を関連づける過去のセンサス分析では、離農に向かう一世代家族と豊富な労働力を抱える重世代家族との生産力格差の存在、そしてその格差に地域性がみられることが指摘されている。つまり、一世代家族の割合が高い西日本や中山間と、重世代家族の割合が高い東日本や平場との地域間格差として発現しているのである。

以上にみられる一世代家族の農業生産の停滞・縮小傾向については異論はない。しかしながら、近年における輸入圧力や米価下落にみられる厳しい環境下では、一方の重世代家族においても経営に関わらない世帯員が増加していることは想像に難くない。すなわち、「家」としては二・三世代の割合が高い地域といえども、「経営」としては一世代となっていることが予想されるのである。

このような状況を踏まえ、本報告では経営

面における農家の世代構成に着目し、その差が経営継承の可能性や土地利用状況にどのような格差として現れているか、またその地域の特徴は何かを把握することを目的とする。この経営的側面からみた農家世代に関する統計として、2000年センサスから「家族経営構成別分類」が新設されており、主としてこの分類を用いて分析を行っている。この分類は、農家世帯員の自営農業への参画状況によって、一世代家族経営（一人家族経営／夫婦家族経営）、二世代家族経営（親子家族経営）、三世代等家族経営にタイプ分けするものである（括弧内は、各タイプの内訳で集計されているもの）。

分析から得られた重要な結論は以下のとおりである。

第1に、家の世代構成と経営の世代構成には相違がみられることである。家の世代構成では、二・三世代の割合が高い東日本と一世代の割合が高い西日本との格差が依然として存在する。しかし、経営の世代構成でみた場合には地域間格差は縮小し、いずれの地域ブロックにおいても一世代家族経営が6～7割存在しているのである。

第2に、全国的に広範に存在する一世代家族経営には、二つの異なった形態—すなわち一人家族経営と夫婦家族経営に分けられることである。両者とも農業後継者が不足しているため、その継承性に問題を抱えるが、特に高齢の夫婦家族経営では問題が深刻である。

しかしながら、農業労働力を2人確保している夫婦家族経営の方が一人家族経営より経営基盤が確立しており、農地資源でも3～4割のシェアを占めている。

問題は、このような夫婦家族経営のリタイアへの対応であろう。現状のところ、夫婦家族経営の割合が高く、経営継承の問題が深刻化している北海道や西日本では新規参入対策が盛んになっている。しかし、全国的にみても夫婦家族経営は広範に存在しているため、その継承問題は一部の地域だけの問題ではない。その対策に緊急に取り組む必要がある。